

MACF礼拝説教要旨

2021年11月7日

「イエスの系図、その意図」

ルカによる福音書3章

3:23 イエスが宣教を始められたときはおよそ三十歳であった。

イエスはヨセフの子と思われていた。ヨセフはエリの子、それからさかのぼると、

3:24 マタト、レビ、メルキ、ヤナイ、ヨセフ、

3:25 マタティア、アモス、ナウム、エスリ、ナガイ、

3:26 マハト、マタティア、セメイン、ヨセク、ヨダ、

3:27 ヨハナン、レサ、ゼルバベル、シャルティエル、ネリ、

3:28 メルキ、アディ、コサム、エルマダム、エル、

3:29 ヨシュア、エリエゼル、ヨリム、マタト、レビ、

3:30 シメオン、ユダ、ヨセフ、ヨナム、エリアキム、

3:31 メレア、メンナ、マタタ、ナタン、ダビデ、

3:32 エッサイ、オベド、ボアズ、サラ、ナフシヨン、

3:33 アミナダブ、アドミン、アルニ、ヘツロン、ペレツ、ユダ、

3:34 ヤコブ、イサク、アブラハム、テラ、ナホル、

3:35 セルグ、レウ、ペレグ、エベル、シェラ、

3:36 カイナム、アルパクシャド、セム、ノア、レメク、

3:37 メトシェラ、エノク、イエレド、マハラルエル、ケナン、

3:38 エノシュ、セト、アダム。そして神に至る。

1) 公生涯開始

3:23 「イエスが宣教を始められたときはおよそ三十歳であった」とあります。

21節にはイエスさまがヨハネから洗礼をお受けになったとありました。

いよいよ、救い主としての活動を開始されるのです。

その時、およそ三十歳だった ということです。

この三十歳という年齢ですが旧約聖書では、祭司が聖所で奉仕を始めることができる年齢は三十歳とされています。

またダビデが王になったのも、何人かの預言者が神様によって立てられたのも三十歳の時だったので三十歳というのが「使命に生きる」という意味では重要な年齢だったのかもしれませんが。

それまでは2章40節に

「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた」とあり、52節にも

「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された」とあります。

主イエスが、神様の恵みに包まれて、心も体もすくすくと育ち、知恵に満ち、神様と人々とに愛される者となったことが語られています。

それ以上のことを語っているわけではありません。

イエスさまは幼い時からいかにも神の子らしい特別な力を持った方だった、ということではないのです。

2章51節には「それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった」とありますが、普通の少年として生活していたのです。

イエスさまは、その誕生の物語において語られているように、神様の子として、ダビデの王座を受け継ぐメシアとしてお生まれになったのですが、三十歳で活動を始める前までのその生活は、私たちと変わることのない、普通の人間だったのです。

そのイエスさまが、三十歳になって、神様の導き

によっていよいよ救い主としての活動を開始されるのです。

2) イエスの系図

しかしその活動を語る前にルカは本日の所で、イエスさまの系図を語っています。イエスさまから始まって、その父へ、そのまた父へと遡っていき、最初の人間アダムにまで至る長い名前の羅列がなされているのです。この系図にはいったいどんな意味があるのでしょうか。聖書の中にイエスさまの系図はもう一つあります。新約聖書の冒頭、マタイによる福音書1章1節以下です。

実は、イエスさまの系図はマタイによる福音書の1章、そしてルカによる福音書の3章にありますがこの二つが食い違っているのです。そもそも構成が違います。

マタイの方は、アブラハムから始まってイエスさままで降ってくる形であるのに対して、ルカのこの系図は、イエスさまから始めて先祖へと遡っていく形をとっています。

そしてアブラハムを乗り越えてアダムにまで至るのです。

ですからこの二つの系図を見比べるためには、名前の順序を逆にして読んでいかなければなりません。

そのようにして主イエスからアブラハムまでを比較してみると、そこに出てくる名前が全然違っていることが分かります。重なっているのはごく一部です。最も特徴的な違いは、ダビデ以後の系図をどう構成しているかにあります。

大切なのは、福音書は主イエスの伝記ではないということです。

伝記であるなら、その人の先祖についての情報を提供するために、正確な系図を示すことが一つの大きな課題となります。

二つの伝記の系図が食い違っていたら、どちらが正しいのか、という話になるのです。

しかし福音書はどれも、主イエスの伝記を書こうという意図で書かれたものではありません。

それでは何のために書かれたのか。

ルカによる福音書にはその意図が明確に示されています。

1章4節です。

「お受けになった教えが確実なものであることを、よく分かっていたいただきたいのであります」とあります。これが、ルカがこの福音書を書いた理由、目的です。「お受けになった教え」、それは主イエス・キリストの福音です。

主イエスこそ神の子、救い主メシアである、という知らせです。

その教えが本当にその通りなのだ、真理なのだということを示すために、

ルカはこの福音書を書いたのです。ですからこの福音書に書かれていることはどれも、

この目的のために意味があることです。系図も同様です。

マタイにしてもルカにしても、系図を記しているのは、イエスさまの先祖についての正確な情報を

読者に提供することが目的なのではありません。

その系図を通して、彼らはイエスキリストの福音を語ろうとしているのです。

系図の構成の違いは、彼らがそこで福音をどういう視点から語ろうとしているかの違いの現れです。

マタイは、アブラハムから始まり、ダビデを経てイエスさまに至る神の民イスラエルの歩みを見つめ、その中に救い主イエス・キリストを位置づけようとしています。

ルカはそれとは別の視点から、やはりこの系図を用いて福音を語ろうとしているのです。この系図

は新共同訳聖書では「イエスはヨセフの子と
思われていた」という言葉によって始ま
ります。

ここは新改訳聖書では「3:23 教
えを始められたとき、イエスはおよそ
三十歳で、人々からヨセフの子と思
われていた。このヨセフは、ヘリの子、
順次さかのぼって、3:24 マタテの
子、レビの子、メルキの子、ヤンナイ
の子、ヨセフの子、」となっています。

「思われていた」というのは、「人々
からはそう思われていた」ということ
です。

そこには、実際は違うのだけれども、
という意味が込められています。

イエスさまはヨセフの子であると人々
は思っていたが、実際はそうではないの
だ、というのです。このことによってル
カは何を語ろうとしているのでしょうか。

前の章を思い出していただければわか
りますが、母マリアは夫ヨセフによっ
てではなくて聖霊によってイエスさま
を身ごもり、産んだということが語ら
れていました。

遺伝的に言えば、ヨセフはイエスさま
の父ではない、そこに血のつながりは
ないのです。

「ヨセフの子と思われていた」とい
うのはそのことなのでしょう。

もしそうなら、その後にヨセフの先
祖の系図を語るのをおかしなことです。

イエスさまがヨセフの子だとい
うのは人々がそう思っただけで実際
は違うのなら、ヨセフの血筋を遡る
ことに意味はないはず。

ルカは何を考えてこの系図を語
っているのでしょうか。

この系図は、イエスさまの父の名を
ヨセフから始めて一人一人遡って並
べており、その最後に神を置いている
のです。「そして神に至る」という訳
文は、この系図は神に至る、という
意味に理解すべきです。

つまりこの系図は、イエスさまから
アダムまでの系図ではなくて、神に
まで至る系図なのです。

そういう系図を語ることによって、
ルカは、イエスさまが、アダムに至
る数多くの先祖たちの子であると同
時に、神の子でもあることを語って
いるのです。

そのように語ることによってこの
系図は、ここに並べられている全
ての人々もまた神の子であることを
示そうとしています。

彼らは主イエス・キリストの系図
につながる者とされたことによって、
神の子とされたのです。

そこに、これから始められよう
としているイエスさまの救い主とし
ての活動の意味、目的が示されて
います。

イエスさまは、もともと主なる
神様の独り子である方です。しかし
その神の子が、アダムの子孫とし
て人間となってこの世にお生まれ
になり、救いのみ業を行なって下さ
ったのです。

この主イエスさまによる救いに
あずかり、イエスさまとつながる
ことによって、私達も神の子とさ
れるのです。

マタイと違ってこの系図が、ア
ブラハムからさらに遡ってアダム
にまで至っていることの意味がそ
こに見えてきます。

イエスさまとつながって神の子
とされる恵みは、アブラハムから
始まるイスラエルの民にのみ与え
られているのではなくて、アダム
の子孫である全ての人々に、つ
まり全人類に与えられているので
す。

私達は、ユダヤ人ではありません
からアブラハムの子孫ではありません
。しかしアダムの子孫ではあり
ます。

それは、血のつながりという話
ではありません。アダムが神様
によって造られ、生かされたよう
に、私達も神様によって命を与え
られ、生かされているのです。

そしてアダムが神様に背いて罪
を犯したように、私達も神様
に対して罪を犯しているのです。

私たちがアダムから受け継いでいるのは罪である
と言わなければなりません。

しかしそのアダムの子孫として神様の独り子主イ
エス・キリストがお生まれになり、
アダムから受け継いだ罪を全て背負って十字架に
かかって死んで下さり、そして復活して下さった
ことによって、
イスラエルの民ではない異邦人である私たちも、
今や神の子とされ、その祝福の内に生きることが
できるのです。

祝福がありますように。

関根一夫

MACF礼拝映像はこちらです。

https://youtu.be/JfW19lOdL_g